

会報神奈川

平成28年4月1日
発行責任者
会長 古木 普 総
〒240-0112 葉山町堀内1025
電話：046(875)2681
<http://www.k-jinja.jp/seinenkai/>

創立六十五周年記念号



平成27年度定例総会にて



神奈川県神道青年会



神奈川県神道青年会



創立六十五周年記念会報発刊に当たって

神奈川県神道青年会 第二十五代会 長 古 木 普 総

此度、神奈川県神道青年会は、創立六十五周年の節目を迎え、本記念会報発刊をもちまして全ての創立六十五周年記念事業を完了する運びとなりました。

記念事業が完遂できましたことは、偏に神奈川県神社庁を始め、県内神社関係者、関係諸団体の皆様のお蔭であるとともに、何よりも先輩諸賢が当会に連綿と情熱を注ぎ受け継いでこられた賜物であり、現在の我々青年会が何不自由なく活動できますこと、感謝の念に堪えません。この場をお借り致しまして改めて御礼申し上げます。

我々は、神奈川県神道青年会創立六十五周年の主題を『画竜点睛』と掲げ、この六十五年目の節目にしっかりと点を打ち、次世代に受け継ぐことを事業指針とし、周年記念事業を展開して参りました。

この記念事業を通じて当会の団結力が一層強固なものとなり、次世代に向けて、しっかりと点を打つことができたことと確信しております。今年度も引き続き斯界の尖兵として確固たる自覚を持ち、青年会活動に邁進して参ります。

結びに、今後とも関係各位の変わらぬご指導ご協力を賜ります様お願い申し上げます、発刊に当たっての挨拶とさせていただきます。

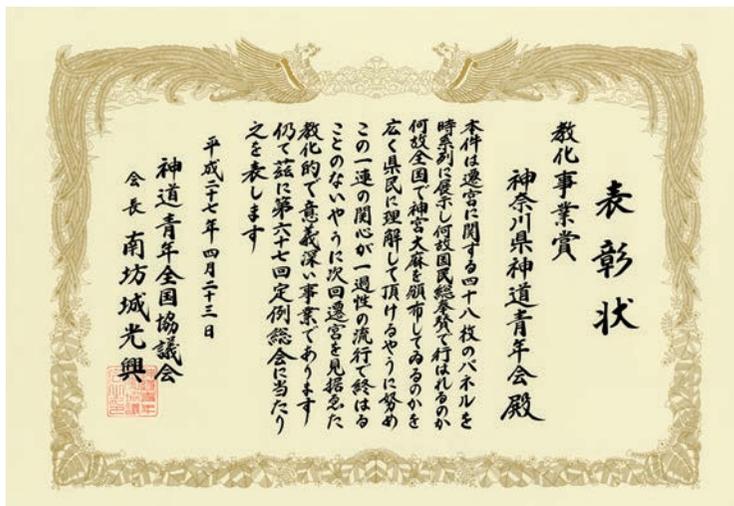
神道青年全国協議会より表彰の事業 (平成24年～平成27年)



稲作体験事業 お田植



東日本大震災パネル展
～伝えよう震災の記憶と復興への絆～
(平成25年2月12・13日)



第六十二回神宮式年遷宮パネル展
(平成26年6月5・6日)

主 題

「画 竜 点 睛」

～しっかりと点を打ち、
次の時代へ大きく羽ばたく～



神奈川県戦没者慰霊祭

神奈川県神道青年会創立六十五周年 会報記念号

目次

式 辞	神奈川県神道青年会会長	古木 普 総……………	6
祝 辞	神奈川県神社庁庁長	吉田 茂 穂……………	7
祝 辞	神道青年全国協議会会長	長友 安 隆……………	8
記念講演録 「三・一一後の日本の歩むべき道」			
	衆 議 院 議 員	小泉 進次郎 先生……………	9
記念事業経過報告			
	記念事業実行委員長	伊藤 俊 州……………	16

創立六十五周年記念事業

硫黄島戦没者慰霊祭……………19

周年奉告参拝旅行（神宮）……………22

禊錬成大会……………23

顔写真入り神職手帳……………24

神奈川県戦没者慰霊祭……………25

創立六十五周年記念大会……………27

結婚促進事業「お宮逢ひ」……………30

記念事業組織図……………32

収支中間報告……………33

協賛者御芳名……………34

編集後記……………38

式辞

神奈川県神道青年会 会長 古木 普 総

先ず以て、聖寿の萬歳と皇室の弥栄をお慶び申し上げます。
また神宮におかれましても、諸祭恙なく齋行されておられますこと慶賀に存じ上げます。

本日ここに、神奈川県神道青年会創立六十五周年記念大会を挙行するに当たり、ご多用にも拘わりませず、神奈川県神社庁庁長 吉田茂穂様を始め県内神社関係者各位、先輩諸賢、関係諸団体、国政、県政、市政それぞれのお立場からこの神奈川県をお守りいただいている議員の皆様、御臨席、神道青年全国協議会会長 長友安隆様を始め、神青協一都七県協議会同志、また全国各単位会の同志のご参集をもちまして記念大会が開催できますこと誠に有り難く、会を代表し、衷心より厚く御礼申し上げます。

また、本周年記念事業に際しまして、関係各位より多大なご支援と格別なご高配を賜りましたこと重ねて御礼申し上げます。

当会は、戦後間もない未曾有の混乱期、昭和二十四年八月十四日発起人会が開催され、初代市川和夫会長をはじめ志を同じくする二十余名の

諸先輩方が集結し、確固たる信念を抱き、国家の再建と神道精神の昂揚を図るべく、同年九月二十五日の発会式をもって、神奈川県神道青年会が発足致しました。設立当時を思いを巡らせますと、先輩諸賢は様々な困難を乗り越えられ、並々ならぬご努力の上結成されたこと拝察致します。

その後、第二代白井永二会長、第三代瀧本正彦会長と禊が受け継がれ、代々打たれてきた点が線となり、現在に至っております。

一昨年、創立六十五周年記念事業実行委員会を立ち上げ、主題に「画竜点睛」と掲げ、「しっかりと点を打ち、次の時代へ大きく羽ばたく」を事業指針とし、各周年記念事業を企画、展開して参りました。

本年は、大東亜戦争終結七十年、日露戦争戦勝百十年の節目の年、周年記念事業の始めとして、昨年の八月には、公益社団法人日本青年会議所関東地区協議会「硫黄島訪島事業」に参画し、限定された条件ではありましたが、硫黄島天山慰霊碑での慰霊祭に、靖国神社より御下賜戴きました御神をお供えし、御霊の安からんこと、祈りを捧げて参りました。また、全国で唯一、護国神社の無い神奈川県でありましたが、本年七月には、県内慰霊施設である神奈川県戦没者慰霊堂に於いて、神奈川県戦没者慰霊祭を齋行し、祖国、我々のふるさと神奈川県をお護り戴きました英霊と、大空襲をはじめ戦禍により犠牲となられた一般戦災死没者の御霊に、感謝と慰霊の誠を捧げて参りました。我々は、祖国の為に命を捧げられた英霊に対し、これまで先輩諸賢が続けてこられた英霊顕彰事業を継承し、次世代へ繋いで参ります。

また、今後の周年記念事業と致しまして、前期の神道青年全国協議会で行われた「縁結会」に賛同し、神奈川県内神職を対象に、本年十一月に結婚促進事業「お宮逢ひ」を展開して参ります。代を繋ぐ意味でも重要な事業と捉えており、この事業を含め残りの周年記念事業完遂に向けて、会員一同一丸となり取り組んで参ります。

本日、創立六十五周年を迎えるに当たり、我々が何不自由なく斯界の尖兵として青年会活動に邁進できますことは、先輩諸賢が絶え間なく情熱を注がれ、会の発展の為にご尽力をされたお蔭であります。創立六十年の折には主題を「回帰し揺るぎなき継承く未来へ」を掲げ、五年の月日が経ちました。我々は先輩諸賢より繋がれた熱き想いの禊を、しっかりと次世代へ受け継ぐべく、斯界発展の為、会員一同勇往邁進する所存です。ご臨席の皆様には、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

結びに当たり、本日、ご臨席賜りました皆様の奉仕神社の弥栄と、各位のご健勝ご多幸をご祈念申し上げます、本式典の式辞と致します。本日は誠に有難うございます。



祝辞

神奈川県神社庁 庁長 吉田 茂穂

この度は神奈川県神道青年会が創立六十五周年を迎えられ、記念式典が開催されますこと、心よりお祝いを申し上げます。

貴会は昭和二十四年に若く意欲の溢れる二十余名の青年神職の力を結集して産声を上げ、歴代会長の下、斯界発展の為に幾多の事業を展開されました。発足から六十五年の歳月を経て、今や百五十名を超える会員を擁する会に成長されたと聞いております。

去る今年六月には、第二十一回神青協一都七県協議会並びに創立二十周年記念総会を、神奈川県が当番県ということで箱根の地で開催されました。会員一同が手を取り合い無事にこの大きな行事を遂行されましたことは、偏に古木会長を始め、歴代会長の下で結束されてきました会員一人一人の努力の賜物と、敬意を表する次第です。そして創立六十五周年記念事業の指針である「画竜点睛」のもと、多くの記念事業を企画実行し、今日この日を迎えられたことは本当に喜ばしい限りです。

さて、本年はご承知の通り大東亜戦争終結七十年を迎え、当庁はもとより多くの方々が靖國神社を参拝されています。英霊に対して感謝の気持ちを含めて靖國神社を参拝し、平和と独立を守った先人たちの歩みを正しく理解し、合わせて御霊の平安を



祈り奉ることは国民斉しく行なうべき務めであります。私たちは引き続き御霊の御心に応えるべく努力するとともに、我が国の美しい国柄を次世代へと伝えていく努力を継続していかなくてはなりません。

七十年前の戦後に目を向けますと、荒廃した状況より立ち上がりんと思考を重ねに重ね、斯界は復興への一歩を踏み出し、ほぼ同時に貴会も誕生しました。そして今日、私たちを取り巻く状況は依然として予断を許さないものとなっております。安倍内閣が推し進める安保法制、憲法改正、これらは戦後七十年を迎え日本の国を自らの手で守るべく、今こそ果たさなければならぬ重要な案件であり、私たちもさらに国民精神高揚に力を注いでいかななくてはなりません。引き続き本県神道青年会の青年神職の皆様には、若くエネルギーの溢れる気概で、柔軟な思考力を駆使して共にこの情勢の打開に邁進して戴けるものと期待をしております。

結びにあたり、貴会の益々の発展と会員皆様のご健勝を祈念し、また神社庁諸行事に対しましてご協力をお願い申し上げます、お祝いの言葉と致します。



祝辞

神道青年全国協議会 会長 友安 隆

本日九月三日は、かの国では抗日戦勝七十周年式典が挙行され、とニュース等で聞きましたが、我が国では、伝統ある神奈川県神道青年会創立六十五周年記念式典が、ご来賓各位、また会員同志各位、さらには友好団体、そして県下の議員先生方多数ご出席の下、我が国の伝統護持、さらには道義国家再興を期す神奈川県下の強い絆の基に、かくも盛大に開催されますことは、我が国にとって本日は国民精神涵養の日となるのではないかと思っております。

貴会は、平素より神道青年全国協議会の諸施策、諸事業に際しまして心からご理解を戴いておりますことに、この場をお借りしまして心から御礼を申し上げる次第でございます。さらに貴会は、昭和二十四年八月の創立以来、戦後の占領下の混沌の中に、我が国の国土復興、神社神道の復興、再建、教化を目的として、諸先輩が並々ならぬ努力のもとに結成をされ六十五年の歩みを積まれて参りました。その間も非常にご苦労が多かったであろう、又誰か一代欠けても、その思いは伝わってないだろうと思えます。それが六十五年後の今日までその情熱と、覚悟と、行動力が伝わっておりますことは、まさに先人の弛まぬ努力の賜物と現役を代表しまして、心から御礼を申し上げます。



式典というのは、先人に感謝をし、そしてこれからの覚悟を表す機会であると思えます。本年、我が国は先の大戦が終結し七十年の節目を迎えることになりました。先の八月十四日に、安倍内閣総理大臣は七十年談話を発表されました。先の大戦に深い悔悟の念と、そして次世代へ謝罪を続ける宿命を背負わせてはならないと表明されました。まさにしかるべきであろうと思えます。しかし我々は祈りの者でございます。

尊い命を捧げられた英霊の慰霊の祭りを積むこと。さらにはその一方で、英霊が夢見た我が国の素晴らしい発展を、現代において当代を代表するものとして、しっかりとその生業を積み、英霊を顕彰する責務が我々にはあると思っております。

この度の六十五周年記念事業の中で、貴会は硫黄島への慰霊祭を率先して実行してくれました。我々神道青年全国協議会の同志も、どうにか硫黄島へ参り、先人に渾水をお届けしたいという思いで、諸施策を実行するにあたり関係団体へ協力を要請して参りましたが、なかなか叶いませんでした。しかし、その道を神奈川県神道青年会がつけてくれました。本年八月二十五・二十六日には我々も全国より同志選抜隊を選び、硫黄島において神式慰霊祭を斎行して参りました。その際にも貴会を代表させていただきます。深く感謝申し上げます。

又六十五周年記念事業において、結婚促進事業「お宮逢ひ」を開催されることですが、我々神社界は明治三十九年に「神社社会祀令」という問題がございました。当時は国家神道下でございましたので、行政管理上神社を統廃合し、強力な神社を残すという施策が行われつつありました。その際に我が先人は立ち上がり、「一道祖神にも御霊がいる、それこそが村々や地域を守る基である」という思いから反対運動を展開しました。しかし、今日において人口減少を見据えながら、東北地方を中心に神社運営が厳しい状況になっております。神職各位が頑張っているところではございますが、やはりその基になる後継者育成を為すことが我々の急務です。貴会が率先して「お宮逢ひ」事業を実施することは、この後継者育成、足元を固めるという意識を感じるところであり、非常に素晴らしい事業であると思えます。

この六十五周年を機に、貴会が先輩各位の情熱をさらに次世代へ伝えるべく、積極的な活動を推進されると信じておりますが、その際にやはり各お社のご隆昌、そして多くの方々のご支援なくしては達成できません。今後も益々神奈川県神道青年会にお力を賜りますように、本日ご出席のご来賓の皆様方に私からもお願いさせて戴くところでございます。

結びに当たり、今後益々の出席の会員各位のご健勝、又神奈川県を発展を心からご祈念を申し上げます、神道青年全国協議会の同志を代表しましてお祝いの言葉とさせていただきます。



記念講演

「三・一一後の日本の歩むべき道」

衆議院議員 小泉進次郎 先生

この度は、神奈川県神道青年会創立六十五周年という節目の会にお招きを頂き、これほど光栄なこととはございません。今日は先輩の斎藤文夫先生、また、地元でお世話になっている吉田茂穂宮司までご出席されている前でお話をさせて頂くことは、国会の予算委員会のように緊張致しますが、最後までお聞き頂ければと思います。

私がそもそもこの六十五周年の記念式典に際しての講演のご縁を頂いたのは、私の地元春日神社の山口真弓（春日神社権禰宜）さんからの依頼でした。実はこの山口さんのお父様と、私の父小泉純一郎が同級生で、そのようなご縁で本当に幼い頃から、私が生まれる前から小泉家と今村家は家族ぐるみでお世話になっているご縁がありましたので、この度この講演をお受け致しました。そうしたら何と、神奈川県神道青年会の古木会長が、旧姓小泉さんと聞き、これも合わせてご縁なんだなと、神奈川県神道青年会にふさわしいご縁を頂きまして、演題にあるように「三・一一後の日本の歩むべき道」と題してお話をさせて頂きたいと思えます。

特に神奈川県神道青年会の皆さま

んは、東日本大震災に際しての原子力発電所事故後も、福島県の避難区域の中に鎮座するお社を守り、綺麗にし、避難生活の中で一時帰宅や、また、家に荷物を取りに来た方、そういった方々が地元の神社に行った時に「ああ、ここは何時も綺麗だな」と心の支えになるような、そういった活動もしてこられたと伺いました。私になぜこの演題を選んだのかというと、日本の将来、そして私達日本人がこれからのどのような国をつかっていくべきか、どんな社会をつかっていくべきか考える時に、喫緊の中で日本のあるべき姿を心の底から考えさせられた、問い直させられた時は何時かと考えたら、私は三・一一だと思えます。大地震が発生し、大津波が起こり、原発事故が発生し、ありえないと思われたことが起きた。その中で多くの命が失われ、多くの方々の人生が失われた。今までの戦後日本の歩みの中で、戦後間もなくの荒廃の中から世界でも経済的に豊かな国を築いて下さった先人達に感謝と敬意を感じながらも、しかし、これから本当にこのままで良いのかと思ったのが三・一一だったと思っています。東日本大震災

の発生から間もなく四年半が経ちます。あの時の思いを今日は、最近起きている世の中の動きの中で、日本社会は変わってきたなと、そのように皆さんと共有をして、そしてそれぞれの地域で子供や高齢者の方への地域の幅広い世代とお付き合いをしている神道青年会の神職の皆さんに、これから何か一つでもヒントになればと思います、お話をさせて頂ければと思います。

「最近社会が変わってきた」と思った例を二つ挙げます。一つは安保法制です。もう一つは東京オリンピック・パラリンピックに関わる様々な出来事の中で感じることです。一つ目の安保法制、最近も多くの方々が若者から世代の上の方々まで、国会周辺で反対の声をあげるということもありました。今までに色んな方が色んな立場で賛成や反対、色んな意見を述べておられます。この安保法制が審議されている中で、私は、日本は変わってきたなと思っております。それは今まで声をあげなかった人があがってきた。それは日本とアメリカを比較するところでも分かり易い。アメリカでは大統領選挙になると芸能人やアーティスト、

そしてハリウッドの役者それぞれが「私は共和党支援」、「私は民主党支援」とはっきり言います。典型的な例は、皆さんも存じだと思いますが、ジョージ・クルーニーという俳優がいます。この方は前回の大統領選挙の時に、オバマ大統領の選挙資金を集めるための政治資金パーティーを、ジョージ・クルーニー主催で行っています。そのジョージ・クルーニーのパーティーに出席された方々は、一人何百万（円）を支払うわけです。

そこでは億単位のお金が集まったと聞きますが、それをオバマ大統領に献金をし、それが政治資金になるわけです。日本である有名な芸能人が、ある特定の政治家の為に政治資金パーティーを主催することを皆さんは想像できるでしょうか。おそらく無いでしょう。なぜなら日本だと、そのような立場がある方は、政治の色を旗幟鮮明に出すと仕事もやりにくい。だからそのような色は出さない。政治とはできるだけ距離を取った方がやり易いとしてきたのが今まででした。しかし今は、芸能人含め著名な方々が、自らがこう思うと、数からしたら多くないかもしれないが、以前ではそのような発言を

されなかった方々が発言をされるように変わってきた。そして国会の周りにいる若者も含めて、今まで声をあげなかった人があがってきた。私は日本社会の変化を感じています。

もう一つが東京オリンピック・パラリンピックに関わることです。国立競技場の計画が白紙撤回され、エンブレムも白紙撤回されました。本当に残念ですね。オリンピック招致で東京都が選ばれた時のあの喜び、そして二〇二〇年の夢のある華やかな祭典に向けてという存在だったはずの東京オリンピック・パラリンピックが、今は触れば火傷をするような感じになってしまった。文部科学省も先日の計画見直しの件で、局長や事務次官が退きました。あのようないことがあると、官僚組織においては、次に何かが出てきては困る、できる限りそのポストはやりたくない、東京オリンピック・パラリンピックに関わると怪我をするかも知れないという意識を持ち始める。今回のエンブレムの問題も、私もデザインに関しては素人なので何が真実かは分かりませんが、あのようなことが発生し白紙撤回になった過程を見ると、

勿論責任は様々な方にあると思いますが、何か問題を発見し粗さを感じて、それを見付けた人が鬼の首を取ったかのような風潮、頑張る人は頑張ってもらえば良いのに、これはどこかで正さなければいけない。おそらく次に新しいエンブレムが決まった時に、また、同じような粗さがしが徹底的に始まるように思います。今日たまたま、ご自身のお嬢さんが美大に通っているという方とお話をしましたら、「自分の娘が同じような専攻を学んでいるが、エンブレムの公募には応募しない。もしも応募して選考に残り採用されたら、家族ぐるみでネットを介した被害を受ける。だから東京オリンピック・パラリンピックの関係には応募しない」と言っていました。若い可能性を潰してはいけません。大きな可能性を秘めている人が、その自分の可能性をいかんなく発揮しようとする意欲を抑制するような空気は変えなければいけない。一度の失敗で全てを失うような社会は良くない。「出る杭は打たれる」と思った方々が萎縮して、「リスクがあるなら安全に」という風潮になった。今インターネットの時代においてリスクが増えてきた

中で、日本社会が変わっている中で私達政治家は何をするべきなのか。最近、私は改めて政治家の役割を考えるようになりました。こういった時こそ物事の悪いところではなく、いいところを見つめる、当たり前のことだが、そのような精神で東京オリンピック・パラリンピックまでの残りの五年間前に進んでいこうじゃないかという、そのような空気をつくっていくことも政治家の仕事なんです。良い時はいい、悪い時はダメ、ピシッと言ってあげるお父さんのような、そのような精神的な支柱となる政治の役割を果たしていかなければならないと思います。

そのようなことから安保法制や東京オリンピック・パラリンピックに関わる様々なことを見てみると、これから日本のあるべき姿、日本の目指すべき社会、私は一つのテーマを決めてやっていかなければならないと思います。これからは「子供」が大切になります。地方創生や復興で全国色々なところに私は伺います。よく国と県と市町村の関係の中で、国はよく悪者役をやりませう。「物事は現場に任せた方がよい」、そのように言われることは多々あります。

しかし、小さな町や様々な地方に行くと、現場に近いほどお互い顔も分かり、今までの様々な人間関係もあることで、現場同士だとかなかなか話がうまく進んでいかないことがあることも事実です。そのような時に政治は何ができるかというのと、「国が言うのなら仕方がない」という嫌われ役を務めることも、国の仕事としてはできる。私

がこの話をなぜするかと言うと、実は、そのような利害関係がぶつかりあつて、街づくりの方向性を考えた時に、大人同士の対立関係が賛否割れている時に、唯一同じ方向を向くテーマは何かと言うと「子供」なんです。次の世代の為にどうするか、街の小学生、中学生や高校生がこのように言っている、このような物を欲しがっている、そういったことが意見として出てきた時は不思議と大人同士の対立が収まることがある。子供達の存在はすごい。これから社会の声というのは、ものすごく多様化します。その中で、あるべき方向性に向けていく中で、日本の人口減少や少子化等の構造的な課題の中で、私達の世代が子供達の為に何ができるのかということを一つの軸に据えて物事を考えていく

と、社会はきつと良い方向に向かっていくはずだと思います。そのようなことから今日、変化している社会の中で私達の、特に神道青年会の四十歳以下の私を含む世代が、是非これから気に留めておいて頂きたいということをお話させて頂きました。

今日は九月三日です。一昨日の九月一日、この日はあることが日本一多い日付です。最近新聞やニュースでも話題になっていましたが、残念ながら十八歳以下の方の自殺です。政府は『自殺白書』というものを毎年出しています。今年から初めて何月何日に一番自殺が多いのかというデータを出しました。かつて毎年三万人が自殺で亡くなっているという時代から、少し景気が上向いたこともあり二万五千人まで現在は減少しています。しかし、減少幅が最も少なかったのが若者だったんです。その若者のデータを見ると、九月一日が明らかに飛び上がっています。そして一年間日付ごとを追っていくと、四月一日など明らかに学校の休み明けに件数が増え、夏休みに入るとガクッと下がる。ここから何が分かるかというのと、「学校に行きたくない」「学校が怖

い」「学校が地獄だ」、そのように思っている子供達がそのような行為をしてしまう時期が、学校が始まる時期ということなんです。私はこの話を最近色々ところでします。特に子供がいなくていいところ。この問題の発信の難しいところは、九月一日に若者の自殺が多いということと言うと、逆に誘導してしまう可能性があるんです。子供の意識に九月一日が残ってしまう。だから子供がいな場所を選んで、こういった時にお話をするんです。皆さんには、学校の休み明けにそのような子供達が多くなることをどこか頭の中で留めて頂きたい。神社に来る子供達や、家族連れや、世の中の子供達に対するあたたかい目のかけ方をして頂く社会をつくっていかなくてはならないから、この話をするんです。

私はこの事実を知って衝撃を受けました。これは何とかしなければいけないと思いました。世界の先進国の中で、若者の死因の一位が「自殺」というのは日本だけです。五十パーセント以上です。十代、二十代の死因の一位ですよ。先進国で日本だけです。他の先進国では、若者の死因の一位は「事故(自動車事故を含む)」です。まさに

社会をより良くしていく為に何が
できるかを考える時に、このよう
なこともある。

そして、この問題に直面してか
ら自分自身の学生時代のことを思
い返しました。確かに学生にとつ
て自分達の生きていく世界は学校
と家だけなんです。社会に出れば
色んな世界があります。趣味の世
界があり、友達の世界があり、仕
事以外でも色々自分なりに世界を
持つことができる。しかし子供達
にとっては学校がほとんど全てで
す。そしてその世界が希望も夢も
感じることができなかつたら一
体どうするか。私は学生時代は小
学、中学校、高校とずっと野球を
していました。自分の能力に気付
かず、プロ野球選手を夢見たこと
もありましたが、学校は違いますが、
近くの高校（横浜高校）で一
つ上にしたのが松坂大輔さんで、
初めて彼と練習試合をした時のこ
とを忘れません。「ああ、このよ
うな人がプロ野球へ行くんだな」
と思いました。自分の夢を諦める
という体験は辛かったですが、高
校三年まで自分の大好きだった野
球をひたすら追求できたことは、
私は幸せだったと思っています。
そこで、「もし事故や怪我や病氣

で野球のできない身体になってい
たら、どのような学生時代を送っ
ていただろうか」と考えたんで
す。もしかしたら自暴自棄になっ
ていたかも知れない。何のために
生きていくのかと思つたかも知れ
ない。私は本当にそれだけ野球が
好きでしたから。その立場の私が、
もしも野球ができなくなつたらと
想像した時に気付いたんです、「紙
一重だな」と。自分が夢とやりが
いを持つていきいきとした学生時
代を過ごし、その後すくすくと社
会の中で歩めるか、もしくは夢や
希望を失つて色んな思いを抱えな
がら悩み苦しんでいる若者と紙一
重だなと思つたんです。そこが想
像力だと思つたんです。

もし皆さんの神社に子供が来
て、また親が来て、「今うちの子
が学校に行きたくないと言つてい
るんです。神主さんどうしたら良
いでしょうか。子供に何と声をか
ければ、どのように対応したら良
いと思えますか」と聞かれたら、
皆さんはどのように答えますか？
「学校に行け」と言いますか？「行
かなくて良いよ」と言いますか？
私は行かなくて良いと思う。人生
の中で学ぶべきことを学べるのは
学校だけかというところではな

い。また、九月一日にそれだけ多
くの若者が自ら命を絶つという行
為をしている日本の中で、学校と
いう場所は命をかけてまで行く場
所ではない。私は是非皆さんに、
皆さんだつたらどうするかを考え
て欲しい。どのように声をかける
かを。そのようなことを考えなが
ら、これから

神職としてそ
れぞれの地域
を守る大黒柱
として、是非
活躍して下さい。
この話をし
ていると、大
人が持つべき
想像力とは何
かということ
も出てくるん
です。私はあ
る方に政治家
として心して
おかなければ
いけないこと
を言われたこ
とがありま
す。その一つ
は、小さなこ
とですが、自

分から自分の誕生日を言わな
い。しかし、自分から誕生日は言
われない方がいい。なぜだと思いま
すか？それは主に二つ理由があり
ます。一つは、誰から誕生日を
お祝いしてもらえる方がいる一方



記念講演 「三・二後の日本の歩むべき道」
衆議院議員 小泉進次郎 先生

で、世の中には誰からも誕生日にお祝いされない方がいるということも考えた時に、世の中で多くの方々から支えて頂いて初めて活躍の場が与えられている政治家は、そこに思いを致さなければいけない。もう一つの理由は、自分の子を亡くした親は、その子が「生きていたら今年で何歳になるな」と、毎年それを数えている。そのことを考えなければいけない。私はこれを心しています。それは想像力の問題だからです。また、別の

ある方にはこのように言われました。夏の暑い日に、クーラーの効いた部屋にいる時、クーラーの無い灼熱の中で生活をしている人のことを思い、冬の寒い日に暖房の効いている暖かくぬくもりのある部屋にいる時に、寒い雪国で毎日雪かきをしなければいけない人のことを思いながら政治をしる。結局これも想像力だと思います。どこまで自分の実体験では分からない部分まで想像力を持ちながら常に生活をして、また、言葉を選び、その中で生まれてくる自分の心からの思いを社会のより良い発展の為に繋げていくか。是非これから多くの方に触れ合うのが皆さんの立場だと思いますので、私

が至らない部分の想像力や懐の深さやあたたかみを持ちながら、地域の発展に皆さんの力をお貸し頂きたいなと思います。

世の中を支えている社会をどうつくるかということを考える上で、基本的に三つの考え方があります。「自助・共助・公助」という考え方です。一番大切なのが自助だというのは言うまでもありません。「自分のことは自分でやる」、そのような精神が無い国に発展はしない。しかし、自分だけではどうしようもない、自分だけでは力不足だという時に、共に助け合って支えていこうという共助というのが不可欠なことも言うまでもありません。そして、そのような共助でも支えきれないとところで公の力が大切なことも言うまでもありません。だからこそ、自助を基本とし、共助と公助をどうやって適切に組み合わせながら社会をつくっていくかというのが政治の一つですが、この中で共助をもう一度考えていきたいと思います。今私は内閣府復興政務官という立場で、色んな幅の政策を担当しています。復興政、社会保障税一体改革、マイナンバー、国家戦略特区、医療戦略、

NPO、地方分権など多くあります。

その中の一つに日本の社会に寄付の文化を根付かせるということも担当しています。なぜ寄付が必要なのかと言うと、まさにそれが共助だからです。立場のある方、ある程度の資産を持っている方、ゆとりのある方がその一部でも世の中の為に使うことによって社会をより強くしなやかなものにしていく。これが比較的根付いているという国がアメリカです。日本とアメリカの経済力の違いを考えると一対三です。日本のGDPが三だとすると、アメリカはその三倍の経済力を持っています。その三倍の経済力を持っているアメリカの寄付総額は日本の二十七倍です。勿論アメリカというのは、ビル・ゲイツなど億万長者が沢山います。そのような方達の力もあるでしょう。しかし、寄付の文化が日本よりも根付いている。では、日本はその文化が根付かない国かという点、私はそうではないと思います。皆さんが誰よりもご存じのように、初詣に行けば多くの方がお賽銭を納める文化があり、日頃からそのような行いをするんです。しかし、なかなかそれが根付

いてこない。残念ながら、阪神淡路大震災や東日本大震災などの災害が発生した時には寄付は大きく伸びます。しかし、それは一過性であって、またすぐその動きが元に戻ってしまうのが今まででした。そこで今年から政府の新たな取り組みとして、十二月を寄付月間にすることを決めました。この寄付月間に際して私が言っていることは、大きな金額を寄付してくれる方はそれで有難い、しかしそれだけでなく、誰もが気軽に寄付に参加できる取り組みをする時に、例えば一人一日一円、この動きをしっかりと社会に根付かせることができた時に、一体どれだけ大きなインパクトになるか。一人一日一円を寄付すると、一日で一億円貯まります。三六五日の一年間それが続けば、約三六五億円貯まるんです。三六五億円で何ができるか調べると、概算要求の中で厚生労働省が子供の貧困対策と一人親家庭の支援を行う上での予算額が三六六億円なんです。一人一円寄付する文化が根付けば、それだけ大きなインパクトを生み出す。これから十二月が寄付月間として根付いてきた時に、十二月というのはクリスマスがありま

すが、その時に誰からもサンタク
ロースからプレゼントが届かない
環境にいる子供達も、日本中の皆
がサンタクロースとしてプレゼン
トが届くような支援の手がいか
ば、こんなに素敵なことはい
でしょう。このようなことを根付か
せることも、これからは大切な時
代であると考えています。

そして、そのようなことを行う
内に、自分だけのことを考える自
己中心的な考え方の時代ではなく
て、利他の精神を持ちながら、人
類の歴史や自然の大きさを考えた
時、自分一人の存在の小ささ、そ
して自分一人の人生の中で果たせ
ることは、地球の歴史や宇宙の歴
史、人類の歴史から考えれば瞬
きをするだけで終わってしまう位
の一瞬かもしれないけど、それが
次の世代に繋がっていくための時
間にしよという思いが生まれる
と思います。それが一人でも多く
の方に共有された時、その社会は
強くなり、優しくなり、あたたか
くなる。これからつくっていく社
会はそんな多様なニーズに応える
ことができるだけの多層で懐の深
い、そして芯のある社会をつくっ
ていきたいと思えます。

東京オリンピック・パラリン

ピックの開催まであと五年、その
後にくる時代は神道青年会の皆さ
ん、私達の世代が活躍する時代が
来ます。人口減少はより進む。高
齢化も今から十年後の二〇二五年
には団塊の世代が全員七十五歳に
なり、より社会保障問題は課題が
多く出てきます。隣の中国を見れ
ば、今は経済の状況が様々動いて
いますが、十年するとアメリカを
抜き世界最大の経済大国になると
いう観測も出ています。そのよう
に日本を取り巻く環境が激変する
中で、私達の世代は何をするか。
今から自分にできることを一つ一
つ積み重ね、そして次の世代によ
り良い社会を繋げていこうではあ
りませんか。私は皆さんだったら
それができると思えます。

私は横須賀で生まれ育ち、前回
の選挙で山口さんのご実家の春日
神社で第一声をあげました。私
は、その時に集まって下さった地
元の方々の顔を見ていたら自然
と涙が浮かびました。「自分は地
域の皆さんに支えられて生きてき
たんだ」、それを痛感したんです。
今日私は、子供達の問題、そして
社会が変化してきたことを、現在
の問題とも絡めながらお話をさせ
て頂きましたが、なぜ私がそのよ

うな思いを持つかという、自分
自身の生い立ちを考えた時に、自
然とそういったことを考えるんで
す。なぜなら私は一人親家庭で
育ったから。私の両親が離婚した
のは私が一歳の時です。しかし私
は有難いことに、家族や親戚の支
えがあり、地域の皆さんの支えが
あり、愛情に対する飢えとか一人
親家庭の孤独とか寂しさとか、そ
ういったことを感じないで成長す
ることができた幸運な男なん
です。だからこそ、もしも私のよう
に家族や親戚の支えも無く、地域
との縁も無い、そのような境遇の
家庭がこれから本当にどうするの
かと、そのような家庭に対して誰
が何をできるのかと考えたら、そ
れこそ政治だと私は思います。光
が当たらないところに光を、もし
て光が当たっているところで、よ
り大きな舞台に羽ばたける人には
より大きな舞台を提供する。それ
こそ政治がやらなければならぬ
ことです。今思い返すと、幼い頃
私は実家の近くのソフトボール
チームに入っていたのですが、大
人になって気付いたのは、近所で
友達やそのお母さん達、町内会
の皆さん（から）、私の聞こえる
ところで私の家の家族の問題と

か、離婚している家だとか、その
ようなことを私は耳にしたことが
ないんです。それを考えると大人
になって気付いたことは、私の地
元の皆さんは、私の聞こえること
ろでそのような話をしないように
してたのではないかと。間接的に
地域が支えてきてくれていたんだ
と。その優しさに育てられてここ
まで来たんだということを強く感
じています。政治家として自助が
大切なことは百も承知です。しか
し、世の中にはこのような共助の
力もあるということをより深く痛
感をして、前回の選挙における春
日神社での第一声でその地域の皆
さんに、そのことをお話しし、お
礼を言いました。「皆さんの優し
さに、大人になってから気付いま
した。本当に有難うございました。
皆さんに支えられて今があること
を忘れないで、これからも頑張り
ます」という第一声をあげさせて
頂きました。こんなに力をもらっ
たことはありませんでした。自分
の力で生きてきたと思うよりも、
自分の力だけでは生きていくこと
ができなかったから、地域の力も
あって生きてこられたと思う方が
力が出る。そのような地元を生ま
れたことは本当に幸運でした。

そしてもう一つ最後にお話をします。皆さんも私と同世代の方が多く、家族を持たれている方も多いいと思います。その方には是非、親の存在の大きさを痛感して頂きたいと思います。私の人生の分岐点、もしかしたら決定的な瞬間だったと思うのが、中学校二年生の三者面談でした。最初で最後でしたが私の父が来てくれて、その時学校の先生が私の父にこう言ったんです。「進次郎君にはもう少しクラスでリーダーシップをとってもらいたいと思うんです。そうすればもっとこのクラスはまとまります。お父さんからも進次郎君にそう言ってもらえませんか」と。私はそのように言う先生を見ながら、何て面倒くさいことを言う先生かと思っていたんです。そんな役割をクラスで演じたいと思っていなかったから。しかし、学校の三者面談というのは皆さんも経験があるかと思いますが、子供は発言できない。そこで父は何を言うかなと思っていたのですが、私の父が先生に返したのはこのような言葉でした。「先生、私は進次郎はそのままで良いと思います。私の父も政治家だったから、政治家を持つ進次郎の気持ちがよく分か

る。恐らく良いことをしても悪いことをしても目立ってしまうから、あまり目立たないようにしようと思うからそのようにするのでしよう。私は進次郎はそのままで良いと思います」と言ってくれた。びつくりしました。あれほどびつくりすることはなくらいびつくりしました。なぜなら、私の父は毎日家にいないんです。政治家だから、より期数も重ねて、より立場が上がるほど地元には帰って来られないし、家にも帰って来られない。よく電話はしていましたが、毎日顔を合わせるわけではないんです。そんな親子関係なのに、自分が思っていることをそっくりそのまま代弁してくれた父の姿を隣で見て、自分のことを、一緒にいる時間がこんなになくても分かってくれるんだと思っただけです。子供とは不思議なもので、自分のことを親がきちんと見てくれていてというのを痛感すると自信が持てるんです。もしもその時に父が、「いいか進次郎。先生が言うように明日からもっとリーダーシップをとって、クラスの中で動いていきなさい」と言われていたら、恐らく今の私はなかったと思います。政治家にもなっていないかった

と思います。今思えばそれ位大きな分岐点だと思います。その大きさを分かるからこそ、親って大変だなと思うんです。もしも自分が親になった時、私は父のような父親になりたい。だけど、もし自分が同じような場に立ったら、同じことを言っただけで、同じ一言を言ったら、一生、子供に「自分のことを分かってくれないんじゃないか」という思いを持たせてしまいかも知れない。それは人生を変えてしまいかも知れない。親の存在は大きいです。親に対する感謝、地域に対する感謝、そういうことを感じれば感じるほど、これからの複雑で多様な社会の中における政治の役割、そして政治家の言葉の重みを痛感してきます。

政治家だけが世の中を動かして、社会をつくる時代ではなくなりました。もしも世の中を変えようと思ったら、ベンチャー企業で活躍をすることも、アメリカのビル・ゲイツのように起業家として名を成して、国よりも資産を持つようになれば、それは時に政治家より世界に影響力を与える時代かも知れない。しかし、政治の役割や政治の力というのは、私はこれから大切なことに変わりはないと思っっています。そしてその大切な力の一つに、これからより出てくるのは、社会の様々な立場にいる方々に耳を傾け、そして皆の言うことは聞けないが、最後そのように決めたのならその方向性で頑張ってみようとする、政治の信頼を築いていくことだと思っています。どうか神道青年会の皆さんにおかれましては、私達政治家にはできない力があるのが、神職の皆さんです。自信を持ってこれからあるべき社会や地域をつくり上げる仲間として頑張っていこうではありませんか。この戦後七十年という節目に、神道青年会の六十五周年という記念事業においてお話をさせて頂き、私なりのあるべき社会というものに対する考え方や思いをお話する機会を与えて頂いた古木会長や、このお話を携えてきて頂いた山口さん、そして関東地方から、また、他の地方からも足を運んで下さった青年会関係者の皆さんに心からのお礼と、これからの活躍に対する期待を申し上げます。本日はご清聴有難うございました。

記念事業経過報告

記念事業実行委員長 伊藤 俊州



人は次の一步を踏み出すに当たり、自身の経験から次の一步をどの様に踏み出すかを考えるといます。

しかし、青年会という組織の中では、自身、会員の経験のみならず、先輩諸賢の歩まれて来た道を辿る事で、会として経験して来た事を知る事が次の一步を進めるための大前提であると考えました。

戦後の疲弊と混乱の中、確固とした信念と使命、そして未来への希望を胸に立ち上がり活動され、斯界の尖兵として驕る事なく、くじける事なく活動をされてきた先輩方がいらした事、そして何より、「この道の為に働こう」と熱き意気込みを結集した様々な活動を通じ、皆が良き仲間になれた事が神奈川県神道青年会の魂だと思えます。

千代に八千代にと詠い、萬歳と唱える悠久の大道は、萬世不変であります。これからも脈々と続いていく青年会の歩みの中で、我々は点でしかないのかもしれない。しかし、しっかりとした点を打ち、次に繋げる事こそ、我々の使命であると考え、事業指針を【画竜点睛】と掲げました。会としての還暦を越え、新たな一步となる創立六十五周年記念事業を通じ、会員相互の信頼が一層深まった当会は、皆様方に支えられながら、更に成長し、大いに発展する事を確信致しております。

一、硫黄島戦没者慰霊祭 斎行

平成二十六年八月二十五・二十六日 硫黄島

国内の大東亜戦争激戦地でありながら、我々が簡単には訪れる事

のできない島が、東京都に属する硫黄島です。硫黄島には自衛隊の基地が置かれており、基本的に関係者以外の立ち入りが制限されていますが、このたびご縁があり、(公社)日本青年会議所関東地区協議会からの依頼を受け、当会渉外部の小峰部長の参加により、神社界として初めて硫黄島での慰霊祭を修めることができました。参加者は総勢五十五名で、初日に事前勉強会を行い、二日目早朝に、航空自衛隊入間基地より自衛隊輸送機にて出発。自衛隊員による案内の下、各戦場跡地等を廻りました。現地には、不発弾や米軍の火炎放射器によって折れ曲がった大砲、島民の食器などが当時のまま残され、持久戦のために日本軍が掘った地下壕は六十度を超える暑さ。物資兵力共に劣勢の過酷な環境の中、本土への空襲を一日でも遅らせるため、命と引き換えに島を守り抜き、英霊となった方々の数は二万人以上と言われ、そのうち未だ一万人以上の方々のご遺骨は島に残されたままです。本事業参加者全員で、天山慰霊碑に於いて、慰霊式を行い、この日のために事前に靖國神社から御下賜戴きました御神と、持参した御米、御神酒、御塩、御水をお供えし、白衣袴で御霊安からんことを祈念し、慰霊の誠を捧げました。



一、周年奉告参拝旅行（神宮）（平成二十七年二月二十四・二十五日）

六十五周年を迎えられた奉告と感謝の意を捧げるべく、本宗である神宮に古木会長以下十六名で参拝し、二日目には熱田神宮を参拝させて頂きました。又、各事業について活発な意見交換の時間を持つこともでき、先輩諸賢が築き受け継がれてきた情熱を後世に伝えるべく、更なる研鑽に努めていく気持ちに参加者皆で再確認致しました。



一、禊練成大会（平成二十七年三月十二日 森戸大明神）

当日の午前は記念講座として、神奈川県神社庁祭式講師小野和伸先生をお招きし、祭式教養講座を開催。午後は森戸の海にて、神奈川県神社庁錬成行事助彦角井司先生の掛声の下、心身を清め、その後、同水谷智賢先生に鎮魂行法についてご指導を賜り、参加者一同、周年事業完遂への意気込みを高めました。

一、神奈川県戦没者慰霊祭 齋行

（平成二十七年七月十四日 神奈川県戦没者慰霊堂）

創立六十周年の折に、神奈川県下大空襲一般戦災死没者合祀慰霊祭を斎行し、大空襲により犠牲となられた方々の御霊を神奈川県戦没者慰霊堂に鎮め祀る事が叶いました。今般、戦後七十年の節目として慰霊堂に鎮まる全ての英霊、御霊に感謝と慰霊の真心を捧げるべく神奈川県戦没者慰霊祭を斎行致しました。



一、創立六十五周年記念大会 開催

平成二十七年九月三日 川崎日航ホテル

記念式典には、県内神職、友好団体をはじめとした御来賓、全国「青年神職同志、協賛業者他多数のご出席を賜り開催致しました。

記念式典に引き続き行われた記念講演には、神奈川県庁の未来を共に築いていく仲間である小泉進次郎先生に復興大臣政務官のお立場から「三・一一後の日本の歩むべき道」と題してお話を戴きました。

また、ご講演後には祝賀会が行われ、多くの方々の新しい絆を結ばせて戴く機会となりました。



一、「顔写真入り神職手帳」作成 頒布 (平成二十七年九月)

創立五十五周年、六十周年時に作成された「顔写真入り神職手帳」。神職相互の交流や諸会合での活用が大きな反響を呼んでいることから、今般、初めてカラー印刷による「顔写真入り神職手帳」を作成致しました。



一、結婚促進事業「お宮逢い」

平成二十七年十一月二十七日 伊勢山皇大神宮

近年、県内青年神職に独身者が多く、後継者の問題も含めて、見過ごせない状況にあります。本人としては結婚を望んでいても、ご縁を結ぶことは一人だけの力では難しいことであると思えます。

そこで神奈川県神道青年会として、神職との結婚を望む一般の女性との出会いの場を設けるとともに、日頃ご社頭以外で交流することの少ない神職という立場への理解を促し、一般社会の方々との斯界との新たなご縁が結ばれることを目指し実施致しました。



一、会報「神奈川 創立六十五周年記念号」発行

創立六十五周年記念事業の集大成として会報「神奈川」の記念号を発行し、本記念事業の記録を次世代へ継承致します。



以上、事業指針「画竜点睛」に基づく八つの記念事業を完遂した事をご報告させて頂きまします。そして、各事業の実施に際しまして、神奈川県社庁、県内神職の方々をはじめ多くの方々より心温まるご支援とご協賛を賜りました。この場をお借り致しまして会員一同衷心より御礼申し上げます。

公益社団法人日本青年会議所関東地区協議会国民国家意識確立委員会主催による平成二十六年度硫黄島訪島事業に参加させて戴きました。当事業は関係者を含め総勢五十五名で訪島し、自国を誇れる歴史観、国家観を身に付け自国に対する当事者意識を持つことを目的としています。

六月八日、明治大学にて行われたオリエンテーションでは、明治大学文学部山田朗先生より、日本とアメリカ双方の観点から硫黄島の戦いの戦争構想、軍事的な内容に関する講演を受け、書籍より分かりやすく鮮明に状況を把握することができました。このオリエンテーションでのレポートが選考基準となり、全国から集まった希望者の約二十名が選出されました。

八月二十五日、入間第一ホテルにて事前勉強会が行われました。



訪島前に行われた事前勉強会



自衛隊輸送機にて硫黄島へ



静寂につつまれた硫黄島

参加者を三班に分け、各題目に沿って意見交換を行いました。参加者夫々の目的と意識は違えど、硫黄島に関わる様々な意見を事前に聞くことができ、訪島時の視野が広がったように感じました。

八月二十六日早朝、入間基地より自衛隊輸送機にて硫黄島に訪島

致しました。基地から見た硫黄島は緑が生い茂り、空と海は境目がわからない程広がり、太陽の光を遮るものはなく、島全体が陽を浴びているようで、何もない綺麗な島でした。かつてはこの島で生活を営み、さらには激戦地であったことを思わせるものは何も見当たりませんでした。

地下壕もそれと同じで、道中は過去のまま残され、足場は悪く、



創立六十五周年記念事業

(公社)日本青年会議所関東地区協議会主催
 自国を誇れる歴史観と当事者意識を
 身に付けるための硫黄島訪島に参加して

伊勢山皇大神宮 権禰宜 小峰 敏風

りませんでした。

しかし、各戦場跡地など、自衛隊員の方々による案内の下、現地を廻ってみるとそこにあるのは砲弾の痕、不発弾の処理が終わっていない道、火山(硫黄)の活動によって足場の確保が取れず立ち入りできない所、火炎放射器によって折れ曲がった大砲、旧島民が使用していた食器類の残骸、あまりの砲撃により形を変えた挿鉢山、それらの上に自然と生い茂った木々。手を施されないまま時間だけが過ぎ去ってしまった現状がそこにはありました。



地下豪の内部

光が全く入らない中、島は生き続けているため、地熱で蒸し返す暑さでした。島には川も池もないため、飲み水の確保ができません。今尚、雨水を利用しているそうです。この過酷な自然環境の中、物資、兵力劣勢の中で戦い抜いた先人の偉業を肌で感じ、基地から見えた硫黄島とは異なり、自然の力と脅威、戦争がもたらした傷跡、その儂い思いが形となって残っていました。

さて、本事業に参加した目的である慰霊祭ですが、整備された天山慰霊碑において、本事業参加者



現在も島に残されている大砲

全員にて慰霊式が執り行われました。また実行委員との協議の結果、当初の望む形での慰霊祭ではありませんでしたが、この日の為に事前に佐野前会長、伊藤実行委員長と共に靖國神社において正式参拝



靖國神社において正式参拝

をさせて戴き、御下賜戴きました御榊、また持参した御米、御神酒、御塩、御水をお供えし、白衣袴で御霊安らかでありますことを祈念し、慰霊の誠を捧げて参りました。

訪島後、すぐに行われた意見交換会では、訪島前と同じ題目に沿って、意見の比較を行い、硫黄島の戦い、遺骨収容、今後の硫黄島の在り方等、訪島前よりも濃密な意見が飛び交う内容で、次世代に継承すべきことを様々な手法や観点から話し合える有意義な時間となりました。

先祖を敬い自然に感謝する日本



天山慰霊碑にお供えした靖國神社より御下賜の御榊

の国家観や文化、そして英霊の顕彰と慰霊の継承、その然るべき姿が薄れている現代の問題が、本事業に参加することで、明白に浮かび上がりました。

「精魂を込め戦ひし人未だ地下に眠りて島は悲しき」



天皇皇后両陛下が硫黄島に行幸啓あそばされた際に、天皇陛下がお詠みになられた御製です。

戦後はまだ終わっていません。風化させてはいけない戦争がもたらしたものを、報道等につくられたものではなく、敬神崇祖に基づく日本の文化を託す未来の子どもたちのために正しく伝えることが、現在を生かされている我々の責務であることを、私の意見として発表させて頂きました。この発表について参加者の捉え方はそれぞれではありましたが、この意見が異業種の方々に広まることを願います。

尚、当会創立六十五周年記念事業の一環として出向させて頂きましたが、これを足掛かりとして毎年行われている公益社団法人日本青年会議所の本事業に当会からも参加し、当会会員に広く硫黄島の歴史を周知すると同時に、神道での慰霊祭斎行を掲げ、継続的に神職の観点から発信することが必要であると思います。そのためには皆様のご協力が必須となります。このことをお願い申し上げます。

あとがき

本事業が行われたのは平成二十



の平和を願った英霊が懸命に戦い守って戴いた上に今の日本が成り立ち、戦後七十年の節目を迎えた今こそ、改めて慰霊の誠を捧げると共に顕彰し、世界の平和の為に我が国がどうあるべきかを考え、そしてそれらを正しく次世代に伝えなくてはならない」。

終戦から七十年の時が経った今、戦後生まれの人口の割合は日本の総人口の八割を超えているそうです。戦争を体験された方々と、戦争を知らない我々の世代の英霊に対する気持ちの温度差は今後色濃く表れてくるように感じます。

このような中で、英霊の顕彰を続けることはもちろんのこと、硫黄島のように当時の爪痕が残った場所直接体で感じ、当時を体験された方々から思いをお聞きし、次世代に当時のことを伝えていくことも必要不可欠ではないでしょうか。限られた機会に、限られた人員しか動員できない事業ですが、硫黄島訪島事業が今後とも続くことを願い、これからも経験者として発信、助言できるよう励んで参ります。

六年のことです。その後、神道青年全国協議会の協力の下、平成二十七年には公益社団法人日本青年会議所と一般財団法人日本文化興隆財団の共催により硫黄島訪島事業が行われました。神道青年全国協議会は協力という形で参加されたのですが、慰霊祭が神式にて行われたという報告を頂戴しております。神奈川県の当会会員が事業の一環として出向したことが、全国の場に繋がりを、より多くの青年神職が現地に赴くことができたそうです。その参加者から次のような感想を頂きました。

「我が国の行く末を案じ、家族



創立六十五周年記念事業

周年奉告参拝旅行(神宮)

潮田神社 宮司 萩原伴雄

平成二十七年二月二十四日〜二十五日に、この度の神奈川県神道青年会創立六十五周年の記念事業の一つである「周年奉告参拝旅行(神宮)」を、古木会長以下十六名にて催行致しました。

初日は先ず外宮にて御垣内正式参拝、内宮にて御神楽奉納並びに御垣内参拝を致しました。平成二十六年に第六十二回神宮式年遷宮を終えたばかりの檜の香り芳しい境内を参進し、天照大御神をはじめ八百万の神々に神奈川県神道青年会創立六十五周年のご奉告と、神恩感謝の赤誠を捧げるとともに斯界の発展を祈念致しました。

その後名古屋に移動してからの懇親会では、今後の周年事業などに関して語り合い、会員の親睦を深めました。

二日目には熱田神宮を参拝致しました。熱田神宮では宮掌の横地様より平成二十五年に創祀千九百年大祭を終えた境内の案内や神楽

殿の拝観など懇切丁寧に説明を戴き会員一同深く感銘を受け帰路に着きました。

本年は大東亜戦争終結七十周年の節目です。当

会におきましても去る七月十四日に、神奈川県

戦災死没者慰霊祭を神奈川県戦没者慰霊堂にて

斎行し、我が日本国をお守り戴いた英霊に對して感謝と慰霊の誠を捧げました。

戦後まもない昭和二十四年に

初代市川和夫会長の下、神奈川

県神道青年会が

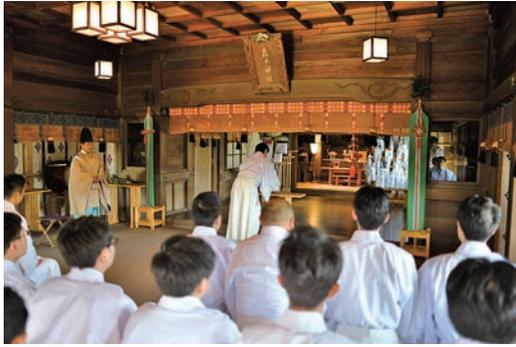


熱田神宮での境内案内

た。当時我が国はGHQの支配下にあり「神道指令」も出され、過酷な状況の中の発足というものは並々ならぬ努力と大変なご苦労があったことと拝察致します。以来六十五年という年月を経た現在、神奈川県神道青年会は第二十五代会長古木普総へと受け継がれました。

今回の周年奉告参拝は先輩諸賢

が築き上げ、連綿と受け継がれてきた歴史と伝統の「会の魂」を後世に伝える責務を再認識し、更なる研鑽の必要性を改めて感じる大変意義のある事業でありました。この誌面をお借りして、この度の周年奉告参拝にてご配慮戴きましたご関係者の皆様衷心より御礼申し上げます。



森戸大明神での正式参拝

平成二十七年三月十二日、神奈川県神道青年会設立六十五周年記念事業が愈々本格化するにあたり、より清浄なる心、明き誠を持ち、全員一丸となつて事業の完遂を目指そうと「禊錬成大会」を、三浦郡葉山町に鎮座する森戸大明神にて実施致しました。



森戸海岸での「鳥船行事」

禊錬成は毎年恒例行事として開催しておりますが、今回は周年記念事業の一環として開催されることとなり、午前は森戸大明神御本殿にて正式参拝の後、「記念講座」として、神奈川県神社庁祭式講師の小野和伸先生をお招きし、『祭式教養講座―祭式の成り立ち―』を開催させて頂きました。



森戸の海にて心身を清める

これは、「神職にとつて最も身に付けなければならないものの一つである祭式作法は、日頃より各報が発令されており、海岸は砂塵



鎮魂行法の講義

午後には森戸海岸にて禊錬成を実施、折しも当日は、強風波浪注意報が発令されており、海岸は砂塵が吹き荒び、海は白波が立つほど荒れておりましたが、神奈川県神社庁錬成行事助彦、角井司先生の気合い充分な掛声の下、清らかな葉山の海に入り、心身を清めました。

創立六十五周年記念事業

禊錬成大会

寒川神社 権禰宜 野村尚広

自分で研鑽を積んではいりますが、成立過程や基となる作法・思想を学び先代の苦心を想い起こせば、更に磨きのかかった作法ができるのではないかと企画したもので、小野先生には、明治初期の神仏分離令により混乱した祭式を整理した「神社祭式」「神社祭式行作法」「神社祭祀令」の成立過程や、旧祭式と昭和十七年、昭和四十六年、平成二十年に改訂された祭式行作法の変更点、更には女子装束の変遷を懇切丁寧にご教授頂きました。

その後は、神奈川県神社庁錬成行事助彦、水谷智賢先生より、鎮魂行法について講義と実践を為し、心身ともに深く魂を落ち着かせました。

先生方のご指導の下、周年事業の完遂に向け、参加者一同が意識を高め合う充実した大会となりました。



創立六十五周年記念事業

顔写真入り『神職手帳』

住吉神社 権禰宜 吉田 祥

六十周年記念事業で作成した「顔写真入り神職手帳」から五年が経ち、今回新たに最新版を作成致しました。

諸先輩方から御好評を戴いている神職手帳ですが、五年も経つと奉職されている方々の顔ぶれもだいぶかわり、実際にお会いしても顔と名前が憶えられないことが多々ありました。当会では、四十五周年記念事業から発行を続けているこの顔写真入り神職手帳を記念事業に入れ、作成に当たりました。

六十周年時に初めて担当となり作成に携わって参りましたが、今回の神職手帳では、神社、顔写真をカラーにし、より見やすくなるように作成致しました。

今回担当になるにあたり、前回の反省点を踏まえて早めの写真、名簿収集、作成を考えて事業に当たりました。神社、顔写真をカラー化するにあたり、画質を良くする

ために、ほとんどの写真を新たに収集する必要がありました。そこで、前回と同様に各支部の青年会員が、手分けをして写真を撮りに出向きました。

作成作業に当たり、神社名、氏名、住所等を青年会員一丸となり何度も確認作業し、発行の直前まで最新のものとすべく作業を進めました。

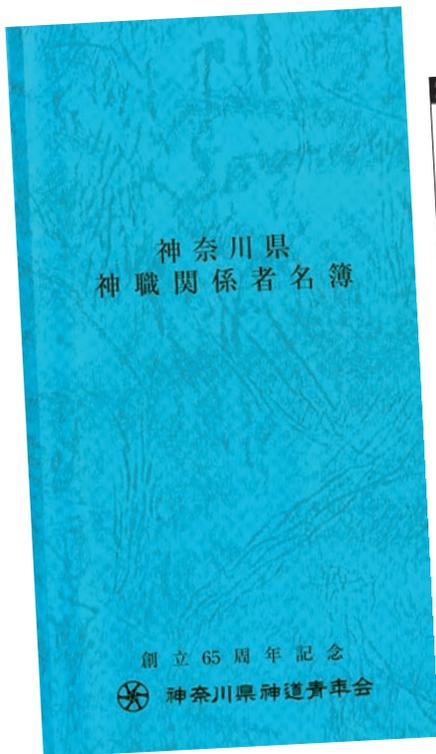
結びに当たりまして、本事業は、県内神職の皆様、神社庁職員の皆様のご協力が無ければ完遂する事は出来ませんでした。ご多忙の中、ご協力戴き感謝申し上げます。この神職手帳をご活用戴いたら幸いです。

神職手帳にご協賛業者御芳名(順不同)

- 株式会社晃和ディスプレイ
- 有限会社竹重
- 瀬戸装束店
- 有限会社西紀
- 森の道具屋

- グリーン産商株式会社
- 株式会社民俗工芸
- 株式会社大和奉神堂
- 京都奉製株式会社
- 株式会社湊
- 株式会社長谷川製作所
- コクド環境株式会社
- 株式会社高善装束店
- 鈴木徽章工芸株式会社

- 有限会社丸井紙店
- 一般財団法人伊勢神宮崇敬会
- 株式会社クレックス
- 株式会社大槻装束店
- 株式会社宮本卯之助商店
- 種村強建築設計
- 株式会社神路社
- 株式会社皆中
- 株式会社可児商店





創立六十五周年記念事業

神奈川県戦没者慰霊祭

寒川神社 権禰宜 水谷 祐也

神奈川県戦没者慰霊祭（神奈川県戦没者慰霊堂）

式次第

- 一、修祓
- 一、齋主一拝
- 一、献饌
- 一、献幣
- 一、祭詞奏上
- 一、御神楽奉奏
- 一、齋王玉串を奉りて拝礼
- 一、参列者玉串を奉りて拝礼
- 一、撤饌
- 一、齋主一拝

所役

齋主	平岡好晃
副齋主	熊谷和真
祭員	長崎佳範
祭員	久保嘉秀
祭員	松尾寛一
伶人（箏）	高嶋弘
伶人（篳篥）	小菅康弘
伶人（龍笛）	田中郁美
舞姫	佐野若菜
奉幣司	伊藤俊州

平和祈念式典（かながわ平和祈念館）

- 一、国歌斉唱
- 一、会長挨拶
- 一、来賓紹介
- 一、来賓挨拶
- 一、献坏
- 一、歓談
- 一、中締め

梅雨が明け、蝉も鳴き厳しい暑

さが始まる去る平成二十七年七月十四日、神奈川県戦没者慰霊堂大前に於いて、当会創立六十五周年記念事業「神奈川県戦没者慰霊祭」を神奈川県遺族会にご協力を仰ぎ、恙無く斎行致しました。

小澤篤至担当副実行委員長を中心に、渉外部にて事前準備が進められました。当日は齋主平岡好晃副実行委員長以下会員四名が祭員を務め、当会顧問永井武義様、角井瑞様を始め、神奈川県議会議員、横浜市議会議員の方々が御来賓として、さらに当会会長古木普総以下会員三十名程が参列致しました。

祭典の中では代表して伊藤俊州実行委員長が献幣の儀にて奉幣司を務めました。さらに当会会員四名により雅楽や浦安の舞も奉奏され、この上ない御霊和めとなりました。斎行後、かながわ平和祈念館において平和祈念式典を執り行



献 饌



御来賓の方々をはじめ当会会員が参列

い、議員の方々と神職で御霊に黙
 禱、並びに献杯を致しました。祭
 典、式典を無事終え、祖国や我々
 のふるさと神奈川を御護り頂いた
 英霊と、戦災により犠牲になられ
 た一般戦災死没者の方々の御霊に
 参列者一同、感謝と慰霊の真心を
 捧げることができました。

当会では創立五十五周年事業
 「神奈川県下大空襲一般戦災死没
 者合祀慰霊の集い」、創立六十周
 年事業「神奈川県下大空襲戦災死
 没者合祀慰霊祭」と斎行して参り
 ました。諸先輩方が大切にされて
 きた慰霊の真心と慰霊祭祀の厳修
 を我々が引き継ぎ、次の世代へと
 伝えていくことが、全国で唯一護
 國神社がお祀りされていない神奈
 川県の青年神職の使命だと改めて
 感じました。

大東亜戦争終結七十年の節目を
 迎えるにあたり、英霊の安らかな
 らんことを祈念申し上げるとも
 に、神職として向かうところを明
 らかにし、これからの我が国日本
 を担う世代として責務を果たして
 いくたく存じます。



伊藤実行委員長による奉幣



祭員参進



祭員による玉串拝礼



浦安の舞奉奏



平和祈念式典での古木会長挨拶



平和祈念式典

次第

第一部 記念式典

- 一、開式の辞
- 一、神宮遙拝
- 一、国歌斉唱
- 一、敬神生活の綱領唱和
- 一、会長式辞
- 一、周年事業経過報告
- 一、来賓紹介
- 一、来賓祝辞
- 一、祝電披露
- 一、『神道青年の唄』斉唱
- 一、聖寿万歳奉唱
- 一、閉式の辞

第二部 記念講演

- 演題 「三・一一後の日本の歩むべき道」
- 講師 衆議院議員 小泉進次郎先生

第三部 祝賀会

- 清興 春日山部屋による清めの太鼓
- 一、開宴の辞
- 一、会長挨拶
- 一、来賓祝辞
- 一、乾杯／鏡開き
- 一、『美しき山河』斉唱
- 一、手締め
- 一、閉宴



敬神生活の綱領唱和

平成二十七年九月三日、川崎日航ホテルに於いて、神奈川県神社庁関係各位、先輩諸賢、多くのご来賓、また神道青年全国協議会並びに神青協一都七県協議会、全国単位会の同志の皆様を含む、総勢三百名近くのご出席を戴き、神奈川県神道青年会創立六十五周年記念大会を開催致しました。

第一部の記念式典では、古木普総会長による式辞、そして伊藤俊州実行委員長による記念事業経過報告が行われた後、神奈川県神社庁吉田茂穂庁長、神道青年全国協議会長友安隆会長よりご祝辞を賜り、記念式典が肅々と進む中で、司会者席から、ご来賓をはじめ



周年記念事業の経過報告

出席されている多くの方々の姿を拝見し、先人が築き上げてこられた神奈川県神道青年会の歴史の重さ、そしてその歴史を次代に受け継ぐ重要性を改めて実感致しました。

第二部の記念講演では、衆議院議員小泉進次郎先生より「三・一一後の日本の歩むべき道」と題してお話を拝聴し、東日本大震災以降の日本社会における様々な変化に注目し、その変化の中で今後青年神職として忘れてはならないものは何か、そしてどのような志を持ち、何を継承しなければならぬかを、幅広い視点から考える機会となりました。

第三部では、早川登幸総務局長、早川道子広報副部長ご夫妻の司会の下祝賀会が行われ、清興として神奈川県内で唯一の相撲部屋であり、川崎市に部屋を構える春日山部屋呼出耕平さんをお招きし、祝宴の場を清め、天下泰平と五穀豊穡を祈る相撲太鼓をご披露戴き、その後の二次会でも春日山部屋の力士の方々により、普段なかなか口にすることができない本場のちゃんこ鍋の振舞いも行われました。そして、この度の記念大会で記念品としてご用意した風呂敷も、春日山部屋のご協力のもと作製されたもので、「神奈川県らしさ」が表現された記念品として皆



様方よりご好評を戴きました。また、祝賀会の鏡開きでは、東日本震災で多大な被害を受け、当会が震災後初めて復興支援を行った宮城県気仙沼市にあり、現在も町の復興を願う操業が続けられている「男山本店」の代表作である「蒼天伝」をご準備し、当会が東日本震災からの復興をこれからも被災地の方々とともに祈り続けることを、ご出席の皆様方にお示しすることができたと思えます。

この度の記念式典・記念講演の司会という大役をお引き受けし、会員相互がそれぞれの意見を出し合い、また、試行錯誤を繰り返して



小泉進次郎先生による記念講演

ながら努力する様子や、そのエネルギーの力強さを会員の一人として感じていましたので、非常に身



御来賓の皆様との鏡開き



春日山部屋による相撲太鼓

の引き締まる思いで記念大会当日を迎えましたが、多くの方々温かい支えがあり無事大役を終えることができました。六十五周年記念事業の主題である「画竜点睛」の言葉のように、たとえ小さな点であってもそれが大きな意味を持つ。日々の生活を送る中で、一つの行いや、人とのつながりを大切にするという原点を、この度の記念式典を通じて学ばせて戴きました。この経験を今後の神明奉仕につなげていきたいと思えます。



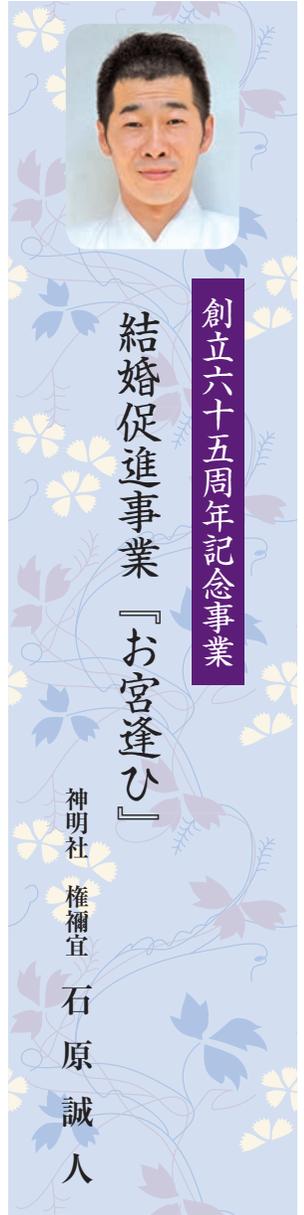
記念品の風呂敷

〔記念式典御祝金御芳名(順不同敬称略)〕

神奈川県神社庁	庁長	吉田	茂穂
鶴岡八幡宮	宮司	吉田	茂穂
富岡八幡宮	宮司	佐野	主水
寒川神社	宮司	利根	康教
箱根神社	宮司	小澤	修二
琴平神社	宮司	志村	幸男
熊野神社	宮司	石川	正人
弥生神社	宮司	池田	清
鈴鹿明神社	宮司	古木	章祐
前鳥神社	宮司	神代	春彦
稲毛神社	宮司	市川	緋佐磨
水神社	宮司	中村	紀美子
女躰大神	宮司	伊藤	美州穂
天照皇大神	宮司	岩澤	具治
八幡大神	宮司	小泉	愉孝
八幡大神	宮司	小泉	浩之
稲毛神社	禰宜	市川	和裕
菊名神社	宮司	石川	國樹
熊野神社	権禰宜	瀬尾	剛良
伊勢山皇大神宮	宮司	池田	正宏
諏訪神社	宮司	依田	龍治
伊勢山皇大神宮	権禰宜	牛田	圭
八幡神社	宮司	宮崎	常嘉
瀬戸神社	宮司	佐野	和史
浅間神社	禰宜	松本	小寿恵
海南神社	禰宜	米田	郷海
皇大神宮	宮司	関根	正統
中津神社	宮司	甲賀	裕樹
村富神社	宮司	根岸	浩行
皇武神社	宮司	茶志川	孝子
水川神社	宮司	石井	洋子
川尻八幡宮	宮司	安西	圭市

六所神社	宮司	柳田	直継
伊勢原大神宮	宮司	宮本	佳昭
比々多神社	宮司	永井	治子
御嶽神社	宮司	草山	清和
比々多神社	禰宜	永井	武義
曾屋神社	禰宜	守山	和宏
八幡神社	宮司	中村	知修
八坂神社	権禰宜	今崎	聡
川崎支部	支部長	小泉	愉孝
横浜南支部	支部長	佐野	和史
相模湘南支部	支部長	白岩	修治
神奈川県神社総代会連合会	会長	斎藤	文夫
神奈川県敬神婦人連合会	会長	斎藤	富美子
神奈川県神社保育連合会	会長	小泉	愉孝
神奈川県女子神職会	会長	中村	紀美子
横浜雅楽会	会長	鈴木	豪
川崎市氏子総代会	会長	斎藤	文夫
足柄・小田原神社総代会連合会	会長	米山	功
日本会議神奈川	会長	木上	和高
神道青年全国協議会	副会長	長友	安隆
神道青年全国協議会	副会長	北川	貴史
神道青年全国協議会	副会長	大森	幹久
神道青年全国協議会	副会長	金田	祐季
神道青年全国協議会	副会長	持田	照久
神道青年全国協議会	副会長	松田	典起
神道青年全国協議会	副会長	田中	芳明
神道青年全国協議会	副会長	小室	悠貴
神道青年全国協議会	副会長	小林	慶直
神道青年全国協議会	副会長	熊代雄	一郎
神道青年全国協議会	副会長	河原	忠徳
神道青年全国協議会	副会長	東角井	真臣
神道青年全国協議会	副会長	藤原	大修
神道青年全国協議会	副会長	浅野	将伯
神道青年全国協議会	副会長	長谷川	宏幸

神道青年全国協議会	理事	吉川	泰正
神道青年全国協議会	委員長	大鳥	居良人
御田八幡神社	禰宜	水野	明彦
咲前神社	宮司	和田	雅之
八幡神社	宮司	多田	光武
渋谷氷川神社	宮司	田村	康雄
雪ヶ谷八幡神社	禰宜	北川	正訓
日光二荒山神社	権禰宜	伊原	弘之
麻賀多神社	宮司	宮本	勇人
浅草神社	禰宜	矢野	幸士
岩手県神道青年会	会長	菅原	政憲
岩手県神道青年会	会長	小野	寺 康
福島県神道青年会	会長	遠藤	正崇
山形県神道青年会	会長	林	重陽
兵庫県神道青年会	会長	上村	宜道
東京都神道青年会	会長	田中	芳明
山梨県神道青年会	会長	藤原	永起
群馬県神道青年会	会長	梅林	健二
栃木県神職むすび会	会長	柳田	耕史
埼玉県神道青年会	会長	東角井	真臣
千葉県神道青年会	会長	岡野	大和
茨城県神道青年会	会長	山内	雄佑
有限会社丸井紙店	会長		
株式会社クレックス			
株式会社大槻装束店			
京都奉製株式会社			
株式会社神路社			
株式会社可児商店			
株式会社大和奉神堂			
株式会社宮本卯之助商店			
鈴木徽章工芸株式会社			
株式会社晃和ディスプレイ			



創立六十五周年記念事業

結婚促進事業『お宮逢ひ』

神明社 権禰宜 石原 誠人

近年、青年神職に独身者が多く、斯界の未来を考えますと看過できない現状にあると考えられ、神道青年全国協議会においても同様の事業が行われる中、当県においても状況は変わりありません。本事業で出合いの場を設けることは、その青年神職達への一助となり、事業の対象者を県内青年神職(男性)と一般女性とすることで、教化の場とも位置付ける事ができ、斯界と一般社会との新しいつながりを生む事業になるものと考え、企画を致しました。

当日は男性二十五名、女性二十四名、また運営スタッフとして会員二十六名が参加をしました。まず伊勢山皇大神宮大前において正式参拝を執り行い事業の無事を祈念し、参加女性におかれては初めて見る神楽舞に魅せられた様子が伺えました。続いて同宮記念館「開明の間」にて各々の自己紹介を含

め、事前に参加女性を対象としたアンケートで伺った私どもへの質問を担当者で精査し、その選り出した質問に神職が答える形式の座談会を開催致しました。少人数のグループを十グループ作り、男性、女性の全ての方々が顔を合わせられるように交代しながら進めました。その席には二名のスタッフがつき、各テーマがテーブルにより異なることのないように気を付けて貫うとともに、テーマにはキーワードも設定し、教化としても同じ方向を向けるようお願いをしました。引き続き隣接する結婚式場である伊勢山ヒルズに場所を移し、懇親会を開催しました。懇親会では特に制約を設けなかった為、参加者同士様々な話題に花を咲かせ、皆が楽しく懇親を深める事ができました。

い雰囲気にて終える事ができました。今回参加された女性には、「氏神様は知っているが自宅に神棚は無い」という、典型的な核家族の家庭像が伺えるアンケート結果があり、本事業を通じて新たな家庭祭祀が始まる事も期待しております。

今回の事業では無理な縁組みは行いませんでしたが、懇親会の途中で印象が良かった方を伺い、自身の連絡先を渡して戴きました。その後も連絡を取り合っているという声も聞こえております。今後の良い報告を待つばかりです。

本事業は総務局、企画部、教養部が中心となり担当を致しました。当会



伊勢山皇大神宮大前での正式参拝

では初めての試みであったこと、また一般の女性を対象としたため、どの様にお迎えをするか、何より神職として一般女性に対してどの様な事業にするべきかを、長い時間をかけて構築して参りました。結婚は各々の自由であります。そのため、それをサポートする立場となると、とても繊細な部分

多く、大変苦労しました。結婚促進事業は様々な方法があるかと思えます。しかし、我々が構築した本事業が参加者の今後の一助となれば大変嬉しく思います。今後も斯界の発展の為に努力をしていきたいと思えます。

座談会題材

- ① 神奈川県神道青年会について
- ② 神宮について
- ③ 氏神様について
- ④ 家庭祭祀について
- ⑤ 神職資格について〜なぜ神職を目指したか
- ⑥ 神社・神職の一年について〜年中祭祀
- ⑦ 神社・神職の一日について
- ⑧ 神職としてやりがいを感じる時について
- ⑨ 結婚相手に求めることについて
- ⑩ 休日の過ごし方について



伊勢山ヒルズでの懇親会



「開明の間」での座談会

〈参加者の声〉

「お宮逢ひ」に参加して

杉山神社 権禰直

中村 聡

平成二十七年十一月二十七日、伊勢山皇大神宮に於いて、当会創立六十五周年を記念して実施された、結婚促進事業「お宮逢ひ」に参加させて頂きました。これは、神社界という特殊な環境に身を置くく身神職の男性会員と、一般社会の女性との出会いと縁を育む一端になるよう、斯界の将来を見据えて行われた事業でした。

当日は寒さの厳しい中ではありましたが、男女それぞれ緊張の面持ちで参加致しました。正式参拝が執り行われた後に座談会の席に移り、双方で自己紹介を行いながら、男性側が主となり会話を進めることに。この場は神道教化の目的もあり、用意された題目には「神宮」「家庭祭祀」「神

社での一日」「休日の過ごし方」といった公私多岐に亘つての会話が交わされました。慣れない場でもあり、あまり会話が進まないのではないかと、との懸念も杞憂に過ぎず、既婚会員の懇切な執り成しのお蔭もあり、どのテーブルも快活な様子が何われました。寛いだ雰囲気ではあつたという間に過ぎ、伊勢山ヒルズでの懇親会は、自由闊達な会話が飛び交っていたことが印象的でした。当初の緊張がほどけた出会いの場は、微笑ましい出会いの会となりました。

ご縁は一方的に与えられるものではなく、各々の努力も要と思います。男女双方の大切な結びの場となった今回の事業に参加させて頂いた経験を、今後の出会いの場に活かすことができるよう努力して参ります。

神奈川県神道青年会 創立65周年記念事業 実行委員会組織図



創立65周年記念事業 収支中間報告

収入計	9,797,000
支出計	6,436,986
収支差異	3,360,014

◆収入の部

(単位：円)

項 目	内 容	予算額 (A)	決算額 (B)	差額 (B - A)	備 考
1	会員拠出金	2,250,000	2,300,000	50,000	前期会員分含
2	協賛金	4,850,000	5,182,000	332,000	8社 神青会OB・県内神社 神社庁 10支部 県総連他
1	別表神社	1,000,000	1,280,000	280,000	
2	県内神社	2,850,000	2,712,000	-138,000	
3	神社庁	300,000	300,000	0	
4	各支部	500,000	550,000	50,000	
5	関係団体	200,000	340,000	140,000	県総連他
3	広告協賛金	500,000	460,000	-40,000	神職手帳
4	雑収入	500,000	855,000	355,000	慰霊祭玉串料、記念大会祝金ほか
5	繰入金	1,000,000	1,000,000	0	歳計調整資金より繰入
	合 計	9,100,000	9,797,000	697,000	

◆支出の部

(単位：円)

項 目	内 容	予算額 (A)	決算額 (B)	差額 (B - A)	備 考
1	記念大会費	5,500,000	4,849,271	-650,729	式典・祝賀会・記念品他
2	記念事業費	2,850,000	1,517,107	-1,332,893	神宮参拝
1	慰霊祭	350,000	249,372	-100,628	
2	神職名簿	950,000	591,610	-358,390	
3	硫黄島事業	60,000	55,648	-4,352	
4	65周年奉告参拝旅行	100,000	103,492	3,492	
5	禊錬成大会	50,000	49,500	-500	
6	結婚促進事業	390,000	467,485	77,485	
7	会報65周年記念号	950,000	0	-950,000	
3	事務通信費	400,000	47,036	-352,964	
4	会議費	150,000	23,572	-126,428	
5	予備費	200,000	0	-200,000	
	合 計	9,100,000	6,436,986	-2,663,014	

平成28年3月31日現在

※当番県として主管致しました神青協一都七県総会が同年に重なりました為、収支余剰金より150万円を充当させて頂きました。

創立六十五周年記念事業御協賛芳名簿 (順不同・敬称略)

〔神社庁・支部〕

◆金、参拾萬円

神奈川県神社庁

◆金、壹拾萬円

足柄小田原支部

◆金、五萬円

川崎支部

横浜北支部

横浜中支部

横浜南支部

鎌倉・横須賀・三浦連合支部

相模湘南支部

相模中央支部

相模原支部

相模中連合支部

〔関係団体〕

◆金、壹拾萬円

神道政治連盟神奈川県本部

◆金、参萬円

神奈川県神社総代会連合会

神奈川県敬神婦人連合会

相模の大風文化保存会

◆金、貳萬円

藤沢湯立神楽保存会

川崎市氏子総代会

◆金、壹萬円

神奈川県女子神職会

足柄小田原神社総代会連合会

藤沢市氏子総代会

神奈川県神社保育団体連合会

神奈川県教育関係神職協議会

鎌倉横須賀三浦連合氏子総代会

横浜市神社総代会連合会

高座氏子総代会

横浜雅楽会

相模原市氏子総代会

相模中央氏子総代会

〔県内神職〕

◆金、参拾萬円

鶴岡八幡宮

寒川神社

◆金、貳拾萬円

江島神社

◆金、壹拾五萬円

箱根神社

◆金、壹拾萬円

熊野神社

伊勢山皇大神宮

富岡八幡宮

鈴鹿明神社

六所神社

平塚八幡宮

伊勢原大神宮

大山阿夫利神社

御嶽神社

八幡神社

比々多神社

村富神社

曾屋神社

熊野神社

宮司 吉田 茂穂

宮司 利根 康教

宮司 相原 冨彦

宮司 小澤 修二

宮司 石川 正人

宮司 池田 正宏

宮司 佐野 主水

宮司 古木 章祐

宮司 柳田 直継

宮司 宅野 順彦

宮司 宮本 佳昭

宮司 目黒 仁

宮司 草山 清和

宮司 中村 知修

宮司 永井 武義

宮司 根岸 浩行

宮司 守山 和宏

権禰宜 瀬尾 剛良

◆金、八萬円
報徳二宮神社

宮司 草山 明久

◆金、五萬円
稲毛神社

宮司 市川 緋佐磨

八幡大神

宮司 小泉 愉孝

八幡大神

禰宜 小泉 浩之

菊名神社

宮司 石川 國樹

笠程稻荷神社

宮司 小野 和伸

浅間神社

宮司 吉田 周司

瀬戸神社

宮司 佐野 和史

杉山神社

禰宜 寶積 章磨

森戸大明神

宮司 守屋 大光

比々多神社

宮司 永井 治子

◆金、參萬円
天照皇大神

宮司 岩澤 具治

女躰大神

宮司 伊藤 美州穂

日枝神社

宮司 山本 雅道

琴平神社

宮司 志村 幸男

神鳥前川神社

宮司 豊浦 崇男

杉山神社

宮司 平岡 好直

羽黒神社

宮司 澤邊 操

富塚八幡宮

宮司 中川 港

岡村天満宮

宮司 杉原 神元

日枝神社

宮司 角井 瑞

御霊神社

宮司 菊地 晋介

皇大神宮

宮司 関根 正統

亀ヶ池八幡宮

宮司 根岸 信行

前鳥神社

宮司 神代 春彦

弥生神社

宮司 池田 清

相州春日神社
相州春日神社
鎌倉宮

宮司 高橋 安彦
禰宜 高橋 秀聡
宮司 長岡 仁志

◆金、貳萬五千円
岡野神社

宮司 磯崎 傳

八幡大神

禰宜 水谷 聖史

鶴見神社

宮司 金子 元重

浅間神社

禰宜 吉田 俊和

諏訪神社

宮司 小池 千穎

五所神社

宮司 小池 建彦

稲荷神社

宮司 諏訪 恒方

水神社

宮司 西山 敦

白幡八幡大神

宮司 吉田 盈一

琴平神社

宮司 長崎 範城

日吉神社

宮司 金子 善光

熊野神社

宮司 中村 紀美子

八幡大神

宮司 小泉 直穂

熊野神社

宮司 萩原 里絵

皇太神宮

宮司 相原 鎮雄

神明社

宮司 萩原 諄夫

神明社

宮司 土岐 章臣

神明社

宮司 水谷 幸世

神明社

宮司 龍山 敬親

神明社

宮司 松橋 孝行

神明社

宮司 伊佐地 誠嗣

御霊神社

宮司 宮本 忠直

神明社

宮司 飯塚 充

八幡神社

宮司 土岐 淳

本牧神社

宮司 當麻 洋一

諏訪社

宮司 橋田 嘉紀

伊勢山皇大神宮

禰宜 牛田 圭

住吉神社

宮司 寶積 尚熙

杉山神社

宮司 宿谷 千鶴子

中村八幡宮

宮司 椎木 葉子

八雲神社

宮司 小坂 周防

諏訪神社

宮司 岩城 純隆

叶神社

宮司 感見 達也

白山神社

宮司 早川 智好

海南神社

宮司 菊池 恵

海南神社

宮司 米田 光郷

雷神社

宮司 米田 郷海

江島神社

宮司 秋山 貞治

鶴沼伏見稻荷神社

宮司 田村 進

柏山稻荷神社

宮司 堀寄 壯

寒川神社

宮司 飯田 啓

寒川神社

宮司 丹下 英紀

寒川神社

宮司 櫻井 貴基

寒川神社

宮司 田中 喜隆

寒川神社

宮司 杉崎 俊彦

日枝神社

宮司 大村 堯通

座間神社

宮司 山本 孝司

座間神社

宮司 谷口 淳一

五社神社

宮司 早川 太満喜

深見神社

宮司 山口 正雄

熊野神社

宮司 毛利 覺

神明社

宮司 仙波 誠一

◆金、壹萬円
住吉神社

白髭神社

稲荷神社

水神社

白幡八幡大神

琴平神社

日吉神社

熊野神社

杉山神社

八幡大神

熊野神社

皇太神宮

神明社

林神社 宮司 水島 泉
 中津神社 宮司 甲賀 裕樹
 皇武神社 宮司 茶志川孝子
 氷川神社 宮司 石井 洋子
 川尻八幡宮 宮司 安西 圭市
 石楯尾神社 宮司 濱野 光雄
 前鳥神社 權禰宜 山口 晴彦
 大山阿夫利神社 權禰宜 鈴木 秀長
 曾屋神社 宮司 守山 文夫
 白笹稻荷神社 宮司 金子 元重
 松原神社 宮司 村上 道明
 五所八幡宮 宮司 中村 昭彦
 思金神社 宮司 平野 正兼
 神社庁 録事 萩原順一郎

◆金、七阡円
 稻荷神社 宮司 石井 直樹

◆金、伍阡円
 宗我神社 宮司 泉 博允
 浅間神社 宮司 樋田 忠義
 今泉神社 宮司代務者 石塚 克正
 堀之内稻荷神社 宮司 近藤 岳雄
 稻荷社 宮司 伊藤 光海
 豊受大神 宮司代務者 岩崎 紀夫

〔会員〕

◆金、伍萬円
 鈴鹿明神社 禰宜 古木 普総
 富岡八幡宮 禰宜 佐野 巖

◆金、四萬円

女躰大神 禰宜 伊藤 俊州
 杉山神社 禰宜 平岡 好晃
 箱根神社 權禰宜 小澤 篤至
 川勾神社 宮司 二見 直樹
 住吉神社 權禰宜 吉田 祥
 溝口神社 宮司 鈴木 敬一
 龍藏神社 宮司 飯谷 秀典

◆金、參萬円

琴平神社 禰宜 志村 幸弥
 日枝神社 禰宜 山本 喜道
 潮田神社 宮司 萩原 伴雄
 熊野神社 權禰宜 松尾 寛一
 神明社 權禰宜 石原 誠人
 伊勢山皇大神宮 權禰宜 小峰 敏風
 杉山神社 宮司 佐野 顕次
 天神社 宮司 川辺 浩司
 鶴岡八幡宮 權禰宜 柳田 崇道
 森戸大明神 禰宜 葦津 元彦
 寒川神社 權禰宜 守屋 隆広
 寒川神社 權禰宜 野村 尚広
 報徳二宮神社 權禰宜 熊谷 俊之
 和真

◆金、貳萬円

八幡大神 權禰宜 小泉 匡史
 神明社 權禰宜 橋本孝太郎
 伊勢山皇大神宮 權禰宜 利根 伸介
 杉山神社 權禰宜 中村 聡
 天神社 禰宜 早川 誉幸
 箱根神社 權禰宜 土屋 慶之

◆金、壹萬円

稻毛神社 權禰宜 長崎 佳範
 若宮八幡宮 宮司 中村 博行
 若宮八幡宮 權禰宜 中村 喜江
 若宮八幡宮 出仕 大森 重宗
 稻荷社 權禰宜 伊藤 南
 琴平神社 權禰宜 志村 結理
 日枝大神社 權禰宜 星野 貴志
 天照皇大神 禰宜 中村 友郎
 溝口神社 權禰宜 岩澤 明史
 溝口神社 權禰宜 山内 稔之
 神鳥前川神社 權禰宜 榊原由貴磨
 熊野神社 禰宜 石神 郁馬
 熊野神社 權禰宜 石川 崇子
 熊野神社 權禰宜 越取 寛昭
 熊野神社 權禰宜 小清水彩乃
 笠稔稻荷神社 權禰宜 日下部成信
 伊勢山皇大神宮 權禰宜 小野ともみ
 伊勢山皇大神宮 權禰宜 藤野 唯史
 伊勢山皇大神宮 權禰宜 小菅 康弘
 伊勢山皇大神宮 權禰宜 菅野 大嗣
 神明社 權禰宜 増田 源弘
 安達 大輔

編集後記

此度、「画竜点睛」を主題として進めてまいりました、当会創立六十五周年記念事業の集大成として、「記念会報」を発行する運びとなりました。

先輩諸賢の、絶え間なき熱き情熱とご尽力により脈々と受け継がれてきた六十五年の節目に「点を打つ」べく、百五十数名からなる現在の当会だからこそ出来る各記念事業を、一丸となって展開してまいりましたことを皆様にご報告すべく、記念会報担当部を中心として編集いたしました。

今後、斯界に大きく羽ばたくであろう次世代の青年会員に、この時代の「神奈川らしさ」を感じていただければ幸いに存じます。

記念大会講演録の掲載をご快諾いただきました小泉進次郎先生、ご協力賜りました皆様方に、衷心より厚く御礼を申し上げます。

記念会報担当副実行委員長 平 岡 好 晃

会報「神奈川」
創立六十五周年記念号

平成二十八年四月一日発行

編集 創立六十五周年記念事業実行委員会
発行 神奈川県神道青年会

葉山町堀内一〇二五

印刷 文明堂印刷株式会社

横須賀市東浦賀一―三―十二

